



# 随筆

## 君の名は

森本あんり

毎朝犬の散歩をしていると、季節の移り変わりを肌身に感  
じることがある。ここしばらくは、どこからともなく涼やか  
で甘い香りがしている。芳香のもとを探してみると、それま  
で何もなかったはずの道ばたのフェンスに、小さな白い花を  
つけた蔓草が絡みついていてではないか。ひとけの少ない早  
朝だから、いっそう香りが引き立つのかも。さして、  
これはいったい何という名の花だろう。ライラックじゃない  
し、ジャスミンでもないし……。

いくらネット社会になったといっても、「香り」のデジタ  
ル化はまだである。検索しようにも、この香りを何という検  
索語にしたらいのかわからない。しかたがないので、「初  
夏に咲く花」とか「蔓性の白い花」とか別の描写語を入れて  
ゆくと、どうやらそれらしい一つの名前に辿り着くことがで  
きた。「ティカカズラ」という名前である。

草花に詳しい人なら、「なあんだ」と思うかもしれない。  
いう名がついた植物は昔も今も日本中にあるわけで、現に  
『古事記』では別の名前と呼ばれていたという。他の時代に  
他の人が他の名前をつけることだってあるだろう。それら  
中から、どうやって一つの名前が他どの競合を勝ち抜いて全  
国制覇したのだろう。今のようにマスコミやインターネット  
があるわけじゃなし、それはその名前を受け入れた人々の口  
伝えで流布され広まってゆく以外にない。

その過程では、おそらく伝統芸能としての能や謡が大きな  
役割を果たしたに違いない。金春禅竹という室町時代の能作  
者に、「定家葛」という作品がある。式子内親王との恋バナ  
も、実はここが出所だった可能性が高い。それが謡になって  
さらに江戸庶民の人口に膾炙し、結局この名前で落ち着い  
た、というのがたぶんまっとうな説明の筋なのだろう。だ  
が、それにしても数百年は経っている。以来日本全国津々  
浦々の人々は、この花を「ティカカズラ」と認識してそう呼  
び続けてきたわけである。やっぱリスゴイ。

わたしは神学や宗教学を専門にしているが、ここ数年考え  
続けてきているのは、「正統と異端」というテーマである。「正  
統」はどのようにして誕生するのか。そして、異端はどのよ  
うにして異端となるのか。しばらく前に流行った『ダ・ヴィ  
ンチ・コード』という映画では、キリスト教「正統」誕生の  
陰には、原始教会の権力者により「異端」として葬り去られ  
た別の伝統があった、というストーリーになっている。  
だが、そんな構図はあまりに非現実的である。「正統」は、

わたしは疎いから、それがどれほどありふれた植物なのかも  
わからない。それでも、あまりに輪郭のはっきりした香りな  
ので、やっぱ名前を知って覚えておきたい、と思ったの  
だ。

「ティカカズラ」という名前には、何やら奥ゆかしい由来が  
あるらしい。その昔、藤原定家が恋心を寄せた相手がい  
たが、わけあってその女性は独り身を守り、若くして亡くな  
ってしまった。彼女を忘れることのできない定家は、やがて葛  
となつてその墓石を抱くように絡みついたという。定家は、  
言わずと知れた『小倉百人一首』の編者である。彼が撰んだ  
百首の中には、自分の歌も、そのお相手とされる式子内親王  
の歌も含まれているが、それぞれに詠まれているのがお互い  
同士のことだったかどうかはわからない。

なるほど。でもそれってスゴくない？ いや、恋の怨念で  
はなく、名前のことである。定家の生きた鎌倉時代といえ  
ば、もう八百年も昔のことである。もの本によると、実は  
さらに前の『古事記』まで遡ることもできるらしい。天照大  
神を石屋戸から引きずり出そうとして天宇受売命が踊るが、  
そのとき髪飾りにした「まさきかづら」がこのティカカズラ  
だった、というのである。でもそれは脇に置いておこう。わ  
たしがスゴイと思ったのは、名付けられたものではなくて、  
その名のことから。

誰かがある日ある時あるものに名をつける。その名はいっ  
たいどうやって人々に認知されるのだろう。ティカカズラと  
人工的な操作で形成できるものではない。その権威はおのず  
と醸成されるもので、いつとはなしに、誰ともなく、知らぬ  
間に多くの人々の心に住み着いたものこそが正統なのであ  
る。

「命名」という当初の行為そのものは、明確な権力行使であ  
る。誰も、自分と無関係のものに名前をつけることはできな  
い。生まれてきた赤ちゃんでも、多額の寄付をした建物で  
も、命名するには何かしらのレジティマシーが必要である。  
けれども、最初に命名することと、その名が流布すること  
とは、ひとまず別の話である。仮に今日、どこかの国の首相  
が圧倒的な議席数を背景に、「ティカカズラ」を「アベノカ  
ズラ」という名前に変更したとしよう。それ自体は全国に公  
布されて正式な名称となるだろう。だが、数百年後にその名  
前が正統になっているかどうか——それはわからない。権力  
は、うわべの服従を強いることはできても、人々の心の中ま  
で支配することはできないからである。

わたしのいる大学には、「バカ山」と呼ばれる場所がある。  
キャンパス中央にある芝生の小山で、開学以来学生たちの大  
切な憩いのスペースとなってきた。ある時理事の一人が、そ  
んな名前は大学にふさわしくないから「本館前広場」という  
名称に変えろ、と言いついたことがあった。だが、学生たち  
はそんなお達しには涙もひっかけることなく、今も相変わらず  
「バカ山」と呼び続けている。正統の在処は、こうして示  
されるのである。